

【氏名】 阿部 俊大

【所属大学院】 (助成決定時) 東京大学大学院 西洋史研究室

【研究題目】

グレゴリウス改革期バルセロナ伯領における社会変容  
—イスラムとローマ教皇庁の間で—

【研究の目的】

グレゴリウス改革は、教会の世俗権力からの独立、さらには宗教的権威の世俗権力への優越を目指す運動であり、西欧の各地域において世俗権力と教会の関係の再構築を引き起こした。この運動の過程と帰結が、西欧各地域においてその後の国制の発展を方向付け、それらの差違の形成にもつながった。助成受領者は、イスラム教勢力とキリスト教勢力の接点に位置し、かつ早くからローマ教皇と密接なコンタクトを保っていたバルセロナ伯領において、この改革がどのようなプロセスや特徴を持ち、かつどのような影響を国制の形成に与えたかを明らかにすることで、グレゴリウス改革に対するイスラムの影響、また西欧世界形成における教皇庁やイスラムの影響の一端を明らかにすることを図った。その際、同時期のカスティーリャやフランスなどにおける同改革との比較を行うことで、これらの諸地域における政治・社会構造の差違の形成、その過程や要因の一端を明らかにすることを目指した。

【研究の内容・方法】

バルセロナ伯領（地域としてはカタルーニャ）のグレゴリウス改革についての従来の研究では、カタルーニャ人研究者は「神の平和と休戦」運動などのカタルーニャ固有の要素やカタルーニャ人の改革聖職者の行動を重視し、他方で外国人研究者はローマ教皇庁や南フランスの改革修道院の影響などを重視して、カタルーニャ側の対応に余り注意を払ってこなかった。この結果、いずれの場合でも、世俗権力の代表であるバルセロナ伯の対応や、改革の政治的影響といった側面には余り注意が払われてこなかった。助成受領者は、ローマ教皇をはじめとする改革勢力の行動と、それに対するバルセロナ伯をはじめとしたカタルーニャ側の対応を同時代の文書群から明らかにし、またその背景にあった政治的・社会的背景を合わせて分析・考察することで、それらの対応の動機をも明らかにすることを図った。これらの分析を通じ、バルセロナ伯領においてグレゴリウス改革が世俗権力からどのような対応を受けたのか、またカタルーニャ固有の政治構造や同地域の教会の発展にどのような影響を与えたのかを明らかにした。またこの際、カスティーリャやアラゴン、南フランスなど周辺諸地域への教皇庁の行動やそれらの地域における対応と比較することで、カタルーニャのそれらの地域との個性の分化をも明らかにすることを図った。史料としては、同時期のローマ教皇庁からスペインに向けて発布された教皇勅書群、バルセロナ伯の

文書群、バルセロナ伯領内に存在した3つの司教座（バルセロナ・ジローナ・ビック）の文書群、また「神の平和と休戦」集会の記録文書群や、改革のための教会会議の記録文書群を使用し、これらの文書群の読解と分析を通じて上記の研究を行った。

#### 【結論・考察】

従来の研究では、バルセロナ伯はグレゴリウス改革において、教皇庁や改革聖職者の行動に対して受身の姿勢をとっていたとされてきたが、実際には改革についての教会会議に参加し、或いは自らそれらの会議の開催に加わり、かつ領内の諸教会に諸権利や保護を与えるなど、改革に対して積極的な姿勢をとっていたことが明らかになった。背景には、領内の混乱によって弱まっていた教会との緊密な関係を、教会改革の保護者としての姿勢をとることによって再構築しようとする伯の意図があった。この教会との関係の再構築という意図は、同時期の司教や修道院長たちによる伯への忠誠誓約などからも見て取れる。他方、教会会議の文書などで、伯はしばしばイスラム教徒との戦いにおけるキリスト教徒の指導者、という姿勢を示している。

伯は「改革の指導者」「イスラム教徒との戦いにおける指導者」として、グレゴリウス改革を進めつつ、領内のキリスト教徒のリーダーとして自己の権威の確立を図ったのである。この過程で教皇庁の権威を借りつつレコンキスタやカタルーニャ教会の自立も図られるなど、グレゴリウス改革はカタルーニャの国制の発展に大きく影響したといえることができる。